

# きずな

第11号

2023年2月3日(金)発行

「気づき・考え・行動する」



めざす学校像

「希望と笑顔があふれる楽しい学校」

## 2023(令和5)年のスタートです！

いよいよ2023(令和5)年。月日の流れは本当にはやいもので新しい年がスタートして、1ヶ月がたちました。年始にみなさんが立てた決意や目標に向かって、前向きに取り組んでいるところだと思います。

さて、今年度もあと2カ月です。4月から1年生13名は中堅学年である2年生になり、2年生11名は最高学年である3年生になります。そして、3年生4名は加茂谷中学校を卒業し、それぞれの道(進路)を歩んでいきます。2023年がみなさんにとって、史上最高に輝く年にしてほしいと思います。そのために3月までの一日一日を大切に、新しい学年に向けて、新しい道や進路に向けて、夢と希望をもって今年度のラストスパートをかけてもらいたいと思っています。

## 多様な性について知る

「LGBTQ (+)」という言葉を知っていますか？ LGBTQ (+)とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クエスチョニング(性自認や性的指向について「まだ決まっていない」、「わからない、違和感がある」、「ひとつに決まるものではない」などと思う人)、+(LGBTQの枠に当てはまらない人)をとって組み合わせた言葉です。性的少数者(セクシャルマイノリティ)と言われることもあります。

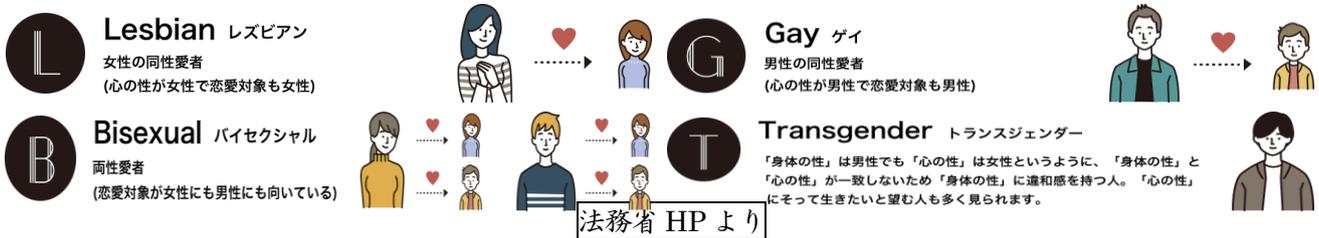


「自分らしく生きる」HPより

性自認とは、自分自身の性別を自分でどのように認識しているかということで、「心の性」と言い換えられることもあります。また、性的指向とは、人の恋愛・性愛の対象がどういう方向に向かうのかを示す概念であり、自分の意志で変えたり、選んだりできるものではないと言われています。

学校で挙げると、「制服」です。学校の制服では、女子はスカート、男子はズボンというスタイルの違いが存在しており、近年では、そういった決めつけをなくし、ジェンダーフリーな制服が導入されつつあります。学校以外の場のトイレの使用に際しても同様です。性自認に基づいてトイレを使用すると、身体とは別のトイレを使用することになるため、周囲の視線や男女別のトイレしかないときに戸惑うというケースがあります。その性自認に基づいたオールジェンダートイレの整備も進められています。

多様な性のあり方を知り理解を深め、性的少数者の人々へ支援の意思を表明できる人(アライ)になっていくのも偏見や差別、いじめをなくしていく1つの手段です。まずは、性のあり方が多様であることを映画や本、講演などを通して知る。自分の身の回りの環境が、多様な性のあり方を前提としているかどうか振り返る。そして、「性的少数者の方々に対する差別的な言動を見かけたら注意する」、「性別を限定する表現を使わない」、「男女分けや決めつけをできるだけ無くす」など今日からできることを行動に移していきませんか。



参考資料：東京都総務局人権部 HP 「性自認」「性的志向」「多様な性について知る BOOK」

# 家庭人権学習の日 (毎月第1日曜日) にご家族で読んでみてください!

## 伝統文化の在り方とは

佐賀県・佐賀県立香楠中学校3年 権藤 佐和

日本には、様々な伝統文化がある。和食、武道、祭り、行事。その数は、きっと数え切れないだろう。

その中の一つ、獅子舞について考えていきたい。私の住んでいる地域では、四年に一度、獅子舞が行われる。そこまで知名度は高くないが、地域の人たちが大切につないできたものだから、これからも守り、伝え続けなければならないと思う。そんな私たちの地域の獅子舞だが、私は少し疑問に思っている点がある。それは、参加できるのが男性のみで、女性は参加できないという点だ。これは、私の地域のみ文化なのかもしれない。だが、私は一度も獅子舞に参加したことがない。もちろん、見たり聞いたりすることはできる。しかし、女性は獅子の演技や、鐘、太鼓の演奏などをすることができないのだ。私は、これは男女差別だと思う。男性のみが参加できて女性の参加が認められないのは、立派な男女差別ではないだろうか。男女差別は、差別は無くしていかなければならない。正直、私には男女差別の明確な定義なんて分からない。けれど、「女の子だから」という理由で獅子舞に参加させてもらえなかった小さい頃の自分を考えると、何だか悔しい。ずっと祖父や父、兄が参加していた獅子舞は私の憧れだった。しかし、私たちの地域の獅子舞は男女差別の前に、伝統文化であるのだ。

私は家族から、「多少の変化はあったものの、この獅子舞は、この形のまま古くから受け継がれてきたもの」だときいた。つまり、ずっと昔から「男性のみが参加できる」という点も受け継がれてきたのだ。今でも女性の参加が認められない、ある意味、伝統文化を守り、残してきたためといえる。文化を守り、後世に伝えるということは素晴らしい。文化継承などというのだろうが、その素晴らしさは学校でもニュースでも、今の時代は色々な場所で感じるができる。だからこそその問題なのかもしれない。はたして、私たちの地域の獅子舞は、「女性の参加を認めない」という点も文化として残していくべきなのだろうか、変えていくべきなのだろうか。

少なくとも、現時点の獅子舞に対して男女差別だと感じている人がいるのは確かだろう。近年は人々への差別の意識が高まってきた。「当たり前と思っていたけれど、もしかすると差別かもしれない」と思っている人が少数でもいるはずだ。それに、私だってその一人である。だが、この文化を変えてしまってもいいのだろうか。今までにでも獅子舞は細やかな変化はあったそうだが、この「男性のみが参加できる」という文化を変えてしまうと、地域みんなで守ってきた獅子舞が違う獅子舞になってしまうような気がする。かと言って、女性も参加できるようなものに変えないとなると、この男女差別はこれからも受け継がれてしまう。

これはとても難しい問題だと思う。私は、これまでの獅子舞を、女性も参加できるように変えていくべきだと思う。前記のように、文化を変えるといった大きな変化は、これからの獅子舞に変化を与えるはずだ。でも、私はみんなで一緒に獅子舞がしたい。また、継承された文化もその時代に合った形へと少しずつ変化しながら、ずっとずっと、いつの時代でも無理なく続くものであってほしい。けれど、考えは人それぞれだ。答えは一つじゃないだろう。もしかしたら、答えさえないのかもしれない。

では、なぜ男女差別が文化として残っていったのか。私は、男女差別は日本の昔からの考えの一つだと思う。「男が家を継ぐ」という話なんかもそうだ。私たちの獅子舞が生まれたその当時は、「男性のみが可」などの現代でいう差別的考えは普通で、そもそも「差別だ」という認識がなかったのではないかと。しかし、様々な情報が飛び交う今、私は古来の文化や考えとの向き合い方について考える必要があると思う。

昔は今の差別的考えが主流だった。だから当時の人々がそれを継承しようとしたのは自然なことだ。そして、その過去を変えることはできない。このことを受け継いだ今の私たちが、その文化とどう向き合っていくか。差別や人権問題について考える現代人みんなに出された一つの課題ではないだろうか。

(第40回人権作文コンテスト 法務事務次官賞)